

人生やり直しますか？

無白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生に飽き飽きした少年のお話です。

初投稿なんで、やり方がいまいち分かってないのもあり色々おかしかったりするかもしれませんが、生暖かい眼で見ていただけたらありがたいです

人生やり直しますか？

目次

人生やり直しますか？

学校に着いた。

いつもと同じように下駄箱の中から自分の上履きを取り出す。早くしなきゃ、みんなが学校に来てしまう。

上履きを履き、目的の場所に行くため階段を上る。

登りなれたはずの階段なのにいつもと違うような違和感を感じた。

名前も憶えて無いクラスメイトとすれ違う。

ああ、人とすれ違っちゃったな。まあ、いいか。

なんとなくで通ってても年月というものは過ぎて行くもので、今日で二年生になる。

一学年上、新しい教室も一つ上。

僕の行くべき教室は2階だ。

しかし、そこには向かわず階段を上り続ける。

用があるのはこれから自分たちが一年間過ごす教室ではない。

用があるのは屋上だ。

スプレー缶でカラフルに彩られたドアを開ける。

休み時間はいつもここに居た。

夏の炎天下の日も、冬の大雪の日も。

目的の場所に辿り着き辺りを見渡す。

大丈夫、誰もいない

それもそうだ。本来、始業のチャイムは8時半に鳴る。今の時刻は7時15分、来てる生徒は少ない。今日が始業式のため朝練も一部の部活しかしてない、屋上に用のあるやつなんて僕くらいだろう。

「きつと、誰も見向きもしない。」

眩いてみた。

返事なんか来るわけない。

周りには誰もいないし、いたとしても僕の声なんか届かない。

それくらいの存在。

「はあ、とんだ人生だったよ。」

何があったのかなんて語りたくもない。否、語る事なんか何もな

い。

中身が詰まっていなくていつからかんの木の実みたいな人生。

熟れるほどの事をしてないはずなのにとつくに熟れてしまった。

あとは、落ちるだけ。

落ちるのが怖い？

怖くない。

もう、この人生には心底飽き飽きしている。

例えるなら、十回はクリアしたであろうRPGみたいなものだ。

未練は、ない

でも、一つ最後に無茶な叶うはずのないわがままを言えるなら。

「無理なのは分かってる、でも、もし神様みたいなこの世の理を超えた者が本当にいるなら、記憶は今のまま、これまでを省みて、人生をやり直してみたい。」

返事などある筈ない。

金属でできた網のフェンスをゆっくりと登りきる。

先程、怖くないと言ったが訂正。

怖い。

でも、もう疲れたんだ。

命を繋ぎとめていた糸が切れる音がした。

その時

「出来ますよ。」

澄んだ、とても綺麗な声が聞こえた気がした。

「なら、よろしく頼むよ。」

重力に任せ落下しながら吐き捨てる。

もう、すぐそこまで地面が近づいて来てる。

未練なんかないはずなのに、もうとつくに諦めてるくせに。

眼から涙が零れた。

「まだ、終いにしたくないな。」

その言葉も虚しく、頭に激しい衝撃。

それとほぼ同時に意識はブラックアウトした。

「人生やり直しますか？」

階段ですれ違った男の子に向けて問いかける。